

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・二八二八
弊NPOは「憲法を改正、経済力と軍事力の両足で健全な国体を支える国家」を求めます。

『揺れる情(こころ)』通信⑥

稱荷山武田病院院長 土屋宜之/元京都医療センター外科部長

前号で「患者様はご家族や緩和スタッフが自分の情(こころ)を共有してくれたと分かれれば感動されます」と書きまじした類はこけて痩せ細ったある患者様は、溢れる涙を拭わずに手を握り合い、抱きしめあっておられました。この溢れる涙は情(こころ)を温め、スタッフも癒されました。分かり合えるということの美しさを体験させて頂いたように思いました。また、血のにじむような看病の果てにある患者様は窓から見える赤い寒椿を愛でて、微笑を残して永眠されました。赤い寒椿を愛でた情(こころ)とは、きっとこの世にこれからも存続するのではないかと直観的に感じました。クラシック音楽をいつも聞いておられた別の患者様はきつとあの世でもご家族と一緒にヴァイオリン協奏曲を聞いておられるだろうと思いました。

※土屋先生は京都大学大学院人間環境学研究所、総合人間学部で講演をされる予定です。

《顔見世の季節》

水口 一夫

今年の顔見世は市川海老蔵改め十三代目市川團十郎の襲名披露の興行です。一段と祝祭性の強い興行となります。襲名披露口上では、市川團十郎家のみに許された「にらみ」という儀式が行われます。片肌をぬぎ、両眼の目玉を鼻に寄せて睨むという目の演技です。睨んで貰うことによって、悪疫が退散すると江戸時代の見物は喜んだようです。襲名披露の演目は昼の部で歌舞伎十八番の「景清」、夜の部で歌舞伎十八番助六が上演されます。歌舞伎十八番の荒事の演技が世間の鬱憤を吹き飛ばしてくれます。

人間国宝片岡仁左衛門が由良之助を演じる「仮名手本忠臣蔵七段目」も見逃せません。地元、祇園の有力茶屋が舞台です。敵討ちの本心を隠して遊蕩にふける由良之助を仁左衛門が演じます。

團十郎の長男、新之助が歌舞伎十八番「外郎売り」で初舞台を、長女のほたんが「男伊達花廓」で初お目見えも話題となっています。

《食べる楽しみ》

常楽臺住職 今小路覚真

国道沿いのネオンがきらびやかな食堂に入りました。券売機でとまどいなから食券を求め、テーブルに着き、番号を機械音声で呼ばれ、お盆に載せられた食材を手にします。ふと考えました。こうしてわたしが手にした食材は、この店がある全国のあらゆるところで盛り方も、味付けも、量も全く同じなんだろうな、という不思議な思いでした。

テレビのコマーシャルでいつも目にしていて、名、そしていつでも食べても同じ容器で同じ味で、同じサービスは確かに安心ではあります。しかし、わたしの食べ物に対する感覚は、少し塩からかったり、甘すぎたり、あるいはその逆であつたりすることに鍛えられてきました。同じ店であつても、その度ごとに僅かにそうした違いが次の楽しみでもありました。いつ行つても一切変化が見られないことに食べることの楽しさをどう見い出せばいいのでしょうか。

《ワインと料理の関係》

イタシヨク 福村直

コロンブスの「卵が先か、鶏が先か？」と同じく飲食の世界でも「料理が先か、ワインが先か？」と言われるほど、どちらの相性に合わせて料理もしくはワインが発展したのかと論争が起こります。今となつては分かりませんが、ともかくそれほどこの両者は密接して食卓を演出してきました。

ワインはスパークリング、白、赤、甘口と幅広い味わいになるため相性の良い料理も多様となります。料理との相性もよく話題となりますが、これについてワインを一つの調味料として考えてみるのも面白いのです。例えば生ガキにレモンを絞りますが、同じ様に柑橘系の香りする酸のしつかりした白ワインと味わう。コシヨウで味付けをするステーキに、スパイス香の強いシラーなどを合わせると両者は自然にマッチングするので、今まで以上に相性を意識して合わせられるかも知れません。

季節の家庭料理

田村 真紀

《十二月 かんたん参鶏湯 (サムゲタン)》

本来は丸鶏に高麗人参、ナツメ等の漢方ともち米を詰めて煮込みますが手羽元で手軽に作ります。《作り方》(4人分) 鶏手羽元十六本(骨と身の間に切込みを入れる)・白ネギ二本(五センチ幅に切る)・んにく二片(潰して芯を除く)・生姜二片(洗って皮付きのまま薄切りにする)・もち米大匙六・ごま油大匙一・半・クコの実大匙一・☆(水一・五リットル・酒百五十ml・塩小匙一)・もち米は洗って水に三十分つけ、水気を切りごま油をまぶす。厚手の鍋にもち米、鶏手羽元、ねぎ、生姜、んにく、☆を加え強火にかけます。煮立ったら灰汁を丁寧に取り除き、弱火で四十分位煮る。鶏肉が柔らかくなったらクコの実を加え更に十分位煮る。塩胡椒(分量外)で味を調える。

《大原流声明雑話⑫》

實光院住職 天納 玄雄

良忍上人の優れた声明の技はいくつもの逸話として伝えられているが、残念ながらその声や唱え様を現代に聞くことは出来ない。しかし産声すら美しく「音徳丸」と幼名がつけられたというから、よほどの美声であつたのだろうと思う。

良忍上人が活躍したのは平安時代後期である。丁度この頃から中世にかけて「能声」や「能読」とよばれる僧侶が持て囃された。ひらたく言えば、イケボでテクニカルに経を読む僧侶たちのことである。よく、声明の音曲は古典邦楽が生まれるための土壌となつたといわれる。勿論その音楽性が優れていたから広く民衆に受け入れられた側面もあるだろう。しかし同時に、その普及には能声や能読たちの活躍が役を買っていたのではないかと思うのである。